

2024年1月1日の能登半島地震直後は、救助を求めている方からのメッセージなどがSNSで多く見られたため、それらを優先して拡散させるためにあえて何も言わずにいた。しかし能登半島地震から1ヶ月半経った今、東日本大震災後の2011年3月19日から続けている「北斗七星プロジェクト」を振り返り、新たな考えを述べる必要があるのではないかと感じてこの文章を書いている。

- ・仙台をはじめとした、被害の少ない地域の方々の「何かしたい」気持ちを満たすこと。
- ・他県の方々の善意を、被災地の方々が実際に喜ぶ方向へ持っていくこと。
- ・被災地の方々の助けになること。
- ・みんなの応援している気持ちが、避難所にいる方々により伝わること。
- ・創造力を持って、みんな楽しむこと。

それらを目的として「被害の少なかった仙台中心部に住む人間」という立場からプロジェクトを始めた。想像以上に多くの方がプロジェクトにご賛同くださり、心より感謝している。

能登半島地震が起きた時は、完璧ではないが「北斗七星プロジェクト」の立ち上げ時の目的は大分満たしていたのではないかと考えている。やはり多くの方が、東日本大震災から教訓を得ていたのではないかと。

このプロジェクトを約13年程続けているが、恐縮ながら私も聖人ではないので、1日も欠かさずに被災地の復興を祈り続けていたわけではない。しかし「被害の少なかった仙台中心部に住む人間」という立場でいながら、東日本大震災をきっかけに職場環境が大きく変わったこと等もあり、少なからず影響を受けている。

良い影響も悪い影響も受けたが、個人的には状況を好転させた結果今がある。もちろん多大なる被害を受けた地域に比べたら影響は小さいと思うが、事実として影響は受けており、その間の感情の変化は複雑である。「北斗七星プロジェクト」から、その感情の変化を読み取ることができる。

この文章を書く前に「北斗七星プロジェクト」のコンセプトを読み直したのだが、実は正直、読むことに対して気が進まなかった。自分自身「北斗七星プロジェクト」の内容がうる覚えとなっていたこともあり

「自分は現実離れした理想論を語っていたのではないか」という不安もあったからだ。

しかし「北斗七星プロジェクト」の文章を読み返した今、当時の自分が想像以上に冷静だったことに驚くと同時に、この文章を書いた自分を褒めてやりたい。このコンセプト自体が東日本大震災における感情の記録と化している。

“自分自身が「北斗七星プロジェクト」の内容がうる覚えとなっていたこともあり「自分は現実離れした理想論を語っていたのではないか」という不安もあった”

ということもまたひとつの感情の動きである。東日本大震災時の「被災地を思って取ろうとした行動が逆効果であったかもしれない」ことに対するトラウマに近い感情が残っていたようだ。これは、芸術文化に関わる多くの人々が抱えている感情ではないかと考えており、多くの方が過去から学んで既に行動を改めている。その為、目に余る行動を実際に確認しない限りは、長期に渡り指摘を続ける必要もないと私は思う。必要のない指摘から、間接的で精神的な「被災」が生まれることもある。とはいえ、状況によってはやはり指摘は必要である。

「北斗七星プロジェクト」の目的は、現在は立ち上げ時と違ったものになっているであろう。

東日本大震災の後は状況も細分化し、その後の環境や感情の変化は更に複雑化した。

「被害の少なかった仙台中心部に住む人間」という立場である、私という人間の感情の動きが「北斗七星プロジェクト」には細かく記録されている。それを私自身が時折振り返り、考えを述べるのが「北斗七星プロジェクト」の現在の活用の仕方ではないかと思う。

そのことが被災地支援の手段を検討する際の、判断材料のひとつにでもなれば良いと思っている。

そんな私は能登半島地震の復興を願い、2024年4月にギャラリー椿で開催されるチャリティー展に参加致します。一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

2024年2月15日 仙台市青葉区より
うじまり